

EM・アフター

遠野静

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、艦これにハマっていた頃に書いたものが出てきたので供養のためにあげます。

陽炎型駆逐艦。舞風と野分の話。

まいのわ。

目次

日記：2日目	1
日記：1週間・10日・2週間	5
日記：×日目、×日目、×日目、1日目	9
終わり	15

日記：2日目

遠征先で舞風が大破したという話を聞いた。

私がそれを知ったのは、数日後の話だった。

鎮守府に戻ってきた舞風は、息をしていなかった。

舞風が戻ってきてから数日が経過した。

だが、誰も彼女の事に触れない。

舞風は除籍扱いになつたらしい。

どうしてだろう、彼女はまだ生きているのに。

でも、おかげさまで無理に戦線復帰させられることはなさそうだ。

それは、安堵する。今の舞風には、しばらく戦闘行為は無理だろうから。

なるほどと私は納得し、今日の任務に向かう。

……帰りに舞風へお土産を買って帰ろう。

部屋の扉を開けるとおかしな匂いがしたので、私は急いで暖房を消した。

舞風は今日も眠ったまま。

彼女はお転婆だから、どこかで悪いモノでも食べたのかもしれない。

「舞風。お腹を出して寝ていては風邪を引くよ」

頭をなでると、潮風に荒れた髪が指に絡む。

柔らかな髪質だったはずだけど、今は柔らかいというより、弱い。

これは、目を覚ましたらまずはお風呂かな——なんて思つて。

「入渠は、あなたが目を覚ましたらね」

大破した舞風が入渠出来ないなんて、うちのドッグ事情はどうなっているんだと、少しだけ憤慨する。

「いずれ提督に進言しよう……つと」

「ごめんね、舞風。忘れていたわけじゃないんだ」

眠る舞風に、私は語りかける。

「舞風。今日は那珂さんと一緒に演習に出たんだ」

最近の日課だ。

あなたが目覚めるまでの間、一日にあったことを伝えると決めた。

「那珂さんは、舞風のダンスのことを気に入っていたよ。」

もう一度踊りたかったと言つてた。

……那珂さん、アイドルになりたいっていうの、本気なのかな」

もちろん、彼女の答えは返ってこないけど。

寝息も聞こえないけれど。

「それなら舞風も、その内アイドルになっちゃうのかな。

……だったら、私がファン一号かな。

もしも目が覚めたら、那珂さんと踊るところを見せてよ」

「……私は無理だよ。何度誘われても無理だったでしょう？」

——今日の話はこれぐらい。

報告終了。

今が冬で助かった。

室内温度を低く保つ。

理由：……？ 理由は……彼女は暑がりだったから。

それに、あんまり心地よい温度だと、「あと五分」と眠り続けてしまうかもしれないし。

「おやすみ。舞風」

電灯を消す。

舞風は瞳を閉じて、眠っている。

宝石のような碧眼を、私はしばらく見ていない。

／

舞風は安定している。

けれど、このまま安置もできないだろう。

私は私の出来る方法で、彼女を永遠にする。

日記：1週間・10日・2週間

「舞風。今日は、陽炎姉さんと話したよ」

「陽炎姉さんは明るい人だよね。……ちよつと、明るすぎて困るくらい」

「そういうところは、舞風に似ているかな」

「それと、私達のことでも心配してくれていたよ？野分、無理してないって？」

「……うん、私は大丈夫。私より、舞風の方がしんどいもんね」

「本当だよ、へつちやらだよ。私は、舞風を守らないといけないもの」

「ああ……でも、一つだけ言いたいことがあったんだ」

「陽炎姉さん、私のことしか心配してなかったんだ。」

舞風のこと、触れてもくれなかったんだよ？ 酷いよね」

「……大丈夫だよ。舞風の事は、私が見ているから」

今日も、舞風からの返答はなし。

心なしか、顔色が悪くなっているように見える。

私に出来ることはあるだろうか。

一週間が経過した。

舞風の顔に化粧を施す。

私の覚えている舞風の顔は、たしかこんな明るくて、瑞々しくて、血色の良い肌色をしていた。

……よく覚えている。ちよつとだけ羨ましいと思つたから。

問題は山積みだ。

簡易の処理では、いずれ破綻するだろう。

深夜、夕張さんから機材を借りた。

「舞風。今日は、不知火姉さんと話をしたよ」

「相変わらず、何を考えているのかわからない人だったけれど……」

「貴女を心配してくれていたよ？ ……嬉しいね」

「起きたら、お礼を言わないとね」

「でも……その前にリハビリかな。眠り続けて、身体も動かないだろうし」

「舞風がまた踊れるようになるまで、私が付き合うから」

今日も報告終了。

舞風に変化なし。

／
10日目

今日施した処理は、防腐と血液の排出。

それと、腐りやすい臓器の摘出。

私の処理が遅かったせいも、皮下の腐敗が止まらない。

末端から腐り始めている。特に両腕は深海棲艦のような色になってしまった。

さすがに化粧でも誤魔化しきれない。

舞風も、こんな腕は嫌だろう。

腐敗が進む前に切断した。

「舞風。今日は、時津風姉さんと話をしたよ」

「……元氣だよ。話していたらちよつとだけ、舞風を思い出した」

「舞風の踊りがみたいって言ってたよ。もしも目を覚ましたら、踊ってあげて」
「その時は……うん。私も踊っても、良いかな」

報告終了。

変化無し。

／

二週間

やはり処置が遅かったのだろう。

両足の腐敗が目立つ。

足を切断した。

彼女の踊りはもう見られないのだろうか。

そう思うと悲しくなった。

でも、まだ繋ぐ手段もあるかもしれない。

舞風の足は、保存しておくことにする。

日記：×日目、×日目、×日目、1日目

「舞風。今日は……浦風姉さんと話をしたよ」

「いや、話す前に、浜風姉さんに止められたんだっけ？」

「何か……言われた気がするけど……あまり、覚えてないな」

「そうだ……それより、私もダンスを、練習しはじめたんだ」

「貴女が起きた時に……一緒に踊れたら、嬉しいな」

報告終了。

／
×日目

骨格はあらかじめ針金を通して固定したものの、

やはり眼窩と腹部の陥没が気になる。

眼球は義眼を用意した。

内臓を摘出した腹部は、どうしよう。

「舞風。今日は——」

報告終了。

「舞風。今日は——」

報告しゆうりよう。

「舞風。今日は——」

ほうこくしゆうりよう。

／

×日目

腹部には人造物を埋める代わりに、貴女の好きだった花を詰めておいた。
飾り気のないものより、きつと貴女は喜ぶだろう。

義腕をお腹に添えると、花を携えて眠っているようだ。
まるで眠り姫のようだった。

王子様のキスで起きてくれたらいいのに。

けれど口づけをしたら、貴女の身体は崩れるだろう。

「今日は——何があつたんだっけ」

「ごめん……最近、ちよつと忘れっぽくて」

「ええと——今日は……そう、夢を……」

「——いやな夢を、見たような」

／

1日目

「珍しいことだ」と、誰かが言った。

整備班の人間……だったと思う。

「珍しいことだ。■■■■した艦娘が、海に沈むことなく戻ってくるだなんて」

私には、彼の言葉の意味が分からなかった。

「通常、■■■■した艦娘は、そのまま海に沈むんだ。

陸で■■■■する状況も……あるにはあるけれど。

その場合は肉を保つことはない」

ノイズが奔る。

単語の意味がところどころ抜け落ちている。

会話の内容が分からない。

「だから、艦娘には慰霊碑はあっても、墓はない。

失われた彼女達の逝き先は、海の底だから」

彼が何を言っているのか、私にはよく分からない。

別の言語を聞いているかのようで。

ただ。

「だから、本当に珍しいんだ」

ひどく。

「■んだ艦が、肉体を保ったまま、鎮守府に戻ってくるなんて」

耳障りな音だと、思った。

「彼女の身体を研究すればきつと——」

煩いから、音源を潰した。

二度とノイズ混じりの音を聞かないように。

静まり返った屋内。

ここに居るのは私と彼女だけ。

「舞風」

声をかける。

彼女は目を覚まさない。

普段から、寝起きの良い方ではないけれど。

まったく起こす身にもなつてほしい。

「舞風。起きて」

彼女の身体には傷一つない。

……ああ、そうだ。戦闘後、だったんだ。

大破した、と聞いていたけれど、彼女の身体は綺麗なまま。

安らかに眠っている。

なら、寝かせておいたほうがいいのかもしれない。

「でも、こんなところで寝ては風邪を引くから、私が部屋に連れていくよ?」

彼女の身体を抱きかかえる。

いつか、せがまれたことのあるお姫様抱っこ。

いつだったか、こうして、無理矢理私にさせようとしてきたんだっけ。

「あの時はそう……『私は王子様じゃないし、あなたもお姫様じゃない』って言ったら、拗ねちゃったんだっけ」

そんな……他愛のないことを思い出す。

だらんと、力を抜いた手がだらりとぶら下がった。

彼女の手を取って、立ち上がる。

いつも私を引つ張る手。

髪の色のように、暖かな手。

けれど、眠る彼女の手のひらは、ひんやりと冷たかった。

終わり

通常、艦娘が轟沈しても遺体が残ることはない。

全て海に沈むからだ。

だから鎮守府には艦娘を弔う慰霊碑はあっても、遺骨を捧げる墓はない。

そもそも私達の身体が人間と同じ保障もないので、骨があるかしらないけれど。

……あるのかな？ 明石さん、夕張さんに聞けばわかるかな。

まあ、今はどちらでもいいや。

艦娘の遺体は残らない。

死んだ艦娘は喪失（ロスト）して、二度と戻ることはない。

だから——そう。

舞風は生きている。

だって、身体はここにある。

彼女は眠っているだけだ。

息はしていないけれど。眠っているだけだ。

心臓も、脈も動いていないけれど。眠っているだけだ。

艦娘の遺体は残らない。

彼女は沈んでいない。

だから舞風は生きている。

でも舞風は寝坊助だから、起きるのに時間が掛かっているだけだよ。

「あなたは、本当に私に心配ばかりかけて……」

舞風を部屋に連れて帰る。

彼女を何時ものベッドに寝かせる。

普段の舞風からは想像もつかないほどに、静かな寝顔。

安らかに瞳を閉じて、いったいどんな夢を見ているのだろうか。

「……ねえ、舞風。起きてください。提督に怒られますよ」

けれど、眠りは深いらしい。

私がいくら触っても、彼女が起きる気配はない。

「ほんとうに、寝つきだけはいいんですから」

舞風が目を覚ますまで、私が彼女を守らないといけない。

あのやかましい蓄音機は言っていた。

舞風の身体を研究すればと。

そんなことはさせてなるものか。

誰だつて眠っている間に他人に身体を触られるなんていやだろう。

だとすれば……。

たとすれば？

鎮守府の誰にも？ 知られてはいけない？

「そう……うん」

鎮守府の人間にも、艦娘にも知られるわけにはいかない。

特に明石さんや、夕張さん。

……悪い人ではないけれど。舞風が起きた時に怒るかもしれないからね？

もちろん、提督だつてそう。

姉妹。艦隊の皆。誰にも。

舞風がここにいることを、知られないようにしなければ。

「心配しないで」

私は、舞風に声をかける。

「あなたは、私を守るから」

私の声に、寝ている舞風からの答えはない。

寝息すらも。

当然。

聞こえる筈がない。

だって、だって舞風は——

「……なにをしているんだろう、私は」

報告、しゅうりよう。

舞風は、なにもかわらない。

おきることも、ねいきをたてることも。

わたしのなまえをよぶこともない。

「起きてよ。舞風」

「起きて、何でも言うことを聞いてあげるから」

「私もダンスを覚えただよ。」

「これであなたと一緒に踊れるよ」

「ねえ、今なら一緒に踊ってあげるから」

「だからさ……起きてよ、舞風……」

／

×日目

……崩れていく。

末端から崩れていく。

それは、なにが？

現実？ それとも私の夢が？

ただ、状況だけが悪くなる。

両足は先に切断した。

右腕は貴女の胸に。

何時もはお転婆なお姫様だけど、寝ていると儂げなお姫様だね……なんて。

今日、彼女の内臓を全てくりぬいた。

ここにあるのは空っぽの胴体だ。

——なのに！

どうして？

物語は進んでいない。

花に囲まれて眠りについたお姫様。

なのに王子様はやってこない。

これじゃあ物語は始まらない。

お姫様が目を覚ましてハッピーエンドが訪れない。
待っている間に、舞風はもう空っぽだ。

もう、踊ることもできないだろう。

「違うか……最初から終わってたんだ、これ」

眠りについたお姫様。

それはきつと、物語の始まりじゃなくて……。

お姫様は眠りにつきました——っていう、物語のエピローグ。

これはもう終わった話。

最初から終わっていた話。

それを私が我儘で、あなたを繋ぎ止めていた。

花のベッドに眠る舞風。

死化粧をした彼女の姿は美しく。

私はきつと、この時間を止めたいと思っていた。

「……けれど、もう終わり……なんでしょね」

これは、そんな——

終わりを引き延ばそうとして、失敗しただけの話だった。

でも——

それでも、私は――

――その日、夢を見た。

花畑に横たわる私の隣で、いつもも見ていた姿の舞風が眠っていた。

「舞風」と、私が何時ものように、声をかけたら――

彼女は「うん」と、目を開けて。

「舞風、今日は――」

私はいつも通りに報告を。

「今日はどうか、私とワルツを――」

・エンバーク・ミング・アフター